

# (1) イネ

## 主要病害虫別防除方法

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
萎縮病 (RDV)	<p>①ツマグロヨコバイ耐虫性品種の大地の風、ゆめまつりを作付けする。 ②育苗場所は、ツマグロヨコバイの飛来の少ないところを選び、集団化する。 ③窒素肥料を過用しない。 ④ツマグロヨコバイの越冬地である雑草地などの雑草を処分する。</p>	<p>①育苗箱施薬により、ツマグロヨコバイを防除する。 (例) イミダクロプリド粒剤 (アドマイヤーCR箱粒剤) カルタップ粒剤 (パダン粒剤4) クロチアニジン粒剤 (ダントツ箱粒剤、ワンリード箱粒剤08) シアントラニプロール粒剤 (パディート箱粒剤) ベンフラカルブ粒剤 (オンコル粒剤5) ②本田初期に1～2回、ツマグロヨコバイを防除する。 (例) エトフェンプロックス粉剤、エトフェンプロックス粒剤、エトフェンプロックス乳剤 (トレボン粉剤DL、トレボン粒剤、トレボン乳剤) フルピリミン水和剤 (エミリアフロアブル) ブプロフェジン水和剤 (幼虫) (アブロード水和剤、アブロードフロアブル)</p>
<p><b>【参考事項】</b> 萎縮病は、ツマグロヨコバイやイナズマヨコバイが媒介する。ツマグロヨコバイは、レンゲ、麦畑、畦畔、雑草地などで越冬する。 雑草地は、ツマグロヨコバイの生息場所となるので、畦畔を含めて広域に防除することが大切である。 常発地では、越冬地の雑草処分や育苗箱施薬等による防除を広域に行うのが効果的である。 第1世代成虫及び第2世代幼虫によって主に伝染がおこる。</p>		
縞葉枯病 (RSV)	<p>①抵抗性品種を選ぶ。 強：あさひの夢、あいちのかおりSBL、大地の風、ゆめまつり、ミネアサヒSBL ②育苗場所は、ヒメトビウンカの飛来の少ないところを選び、集団化する。特に麦畑、イタリアンライグラス、レンゲなどの近くは避ける。 ③早植栽培に多発するので、地域的に移植期をそろえ、多発地では、感受性品種の移植は6月上旬以降にする。 ④基肥や本田初期の窒素肥料は控えめにし、穂肥に重点をおく。 ⑤低湿田、秋落田では、被害が大きくなるので、水管理、施肥などに注意し、根部の健全化を図る。 ⑥ヒメトビウンカの越冬地である雑草地などの雑草を処分する。</p>	<p>①育苗箱施薬により、ヒメトビウンカを防除する。 (例) ジノテフラン粒剤 (アトラクトン箱粒剤、スターダム箱粒剤) クロラントラニプロール・トリフルメゾピリム粒剤 (フェルテラゼクサロン箱粒剤) ベンフラカルブ粒剤 (オンコル粒剤5) ②本田では、ヒメトビウンカに登録のある農薬を選び、早期栽培は5月下旬と6月中旬に、早植栽培は6月上旬～7月上旬に、普通期栽培は6月下旬～7月中旬に防除する。 (例) ジノテフラン粒剤 (アルバリン粒剤、スタークル粒剤) エトフェンプロックス粉剤、エトフェンプロックス粒剤、エトフェンプロックス乳剤 (トレボン粉剤DL、トレボン粒剤、トレボン乳剤) ブプロフェジン水和剤 (幼虫) (アブロード水和剤、アブロードフロアブル) MEP粉剤、MEP乳剤 (スミチオン粉剤3DL、スミチオン乳剤)</p>
<p><b>【参考事項】</b> 縞葉枯病は、ヒメトビウンカが媒介する。ヒメトビウンカは、雑草地、レンゲ、休閑田のスズメノテッポウなどで越冬し、麦畑、イネ科作物、雑草などで繁殖して、6月中旬を中心に第1世代成虫がイネに飛来する。 増殖源となるムギに対してヒメトビウンカに適用のある農薬を散布する。 (例) MEP乳剤 (スミチオン乳剤) ブプロフェジン水和剤 (幼虫) (アブロード水和剤 (小麦)、アブロードゾル (麦類)) エトフェンプロックス乳剤 (トレボン乳剤、トレボンエアー) (麦類) 第1世代成虫と第2世代幼虫の防除が重要である。 第1世代成虫防除は、共同防除など広域一斉防除が効果的である。 水面施用剤は、施用後4～5日間は水深3cm前後に保つようにし、7日間は排水、掛流しなどを避ける。 近年、海外から飛来するヒメトビウンカでは、イミダクロプリド・フィプロニル感受性の低下が確認されている。</p>		
もみ枯細菌病 (細菌)	<p>①健全種子を使用する。 ②塩水選を行い重度罹病もみを除く。 ③厚播きをしない。 ④催芽・出芽時の温度管理に注意する。 ⑤育苗中の高温管理はしない。 ⑥発病苗は使用しない。 ⑦温湯による種子消毒 (60℃、10分) は必ず乾粒を用い、処理温度と時間を厳守する。</p>	<p>①種子消毒を行う。 (例) イブコナゾール・銅水和剤 (テクリードCフロアブル) オキシリニック酸水和剤 (スターナ水和剤) トリコデルマ アトロビリデ水和剤 (エコホープDJ) ②育苗箱施薬を行う。 (例) カスガマイシン粒剤 (カスミン粒剤) イソチアニル粒剤 (ルーチン粒剤) ③穂ばらみ期から出穂期に予防散布する。 (例) フェムリゾン・フサライド水和剤 (ブラシンゾル、ブラシンプロアブル)</p>
<p><b>【参考事項】</b> 本細菌は、育苗期には苗腐敗症をおこし、穂ではもみ枯れをおこす。 出穂時の降雨や出穂後の台風などによる風雨は発病を著しく助長するので、天候が回復したら、速やかに農薬を散布し、二次感染による米質低下を防ぐ。 箱育苗では、催芽・出芽時の高温 (30℃以上) と土壌の過湿、高pHが発病を助長する。 カスガマイシン、オキシリニック酸の耐性菌の発生が全国各地で確認されているので注意する。</p>		

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
褐条病 (細菌)	①健全種子を使用する。 ②塩水選を行い重度罹病もみを除く。 ③厚播きをしない。 ④催芽・出芽時の温度管理に注意する。 ⑤育苗中の高温管理はしない。  <b>【参考事項】</b> 温水循環式催芽機を用いると発生が多い。カスガマイシン耐性菌が発生しているため、種子消毒は必ず行う。 温湯による種子消毒(60℃、10分)は、褐条病に対する効果は低いので、催芽時に食酢処理(循環式催芽機利用)を行う。	①種子消毒を行う。 (例) イブコナゾール・銅水和剤(テクリードCフロアブル) オキシリニック酸水和剤(スターナ水和剤) ②育苗箱施薬を行う。 (例) カスガマイシン粒剤(カスミン粒剤)
苗立枯細菌病 (細菌)	①健全種子を使用する。 ②塩水選を行い重度罹病もみを除く。 ③厚播きをしない。 ④催芽・出芽時の温度管理に注意する。 ⑤育苗中の高温管理はしない。 ⑥温湯による種子消毒(60℃、10分)は必ず乾粒を用い、処理温度と時間を厳守する。  <b>【参考事項】</b> 早期栽培で発生が多い。催芽・出芽時の高温(30℃以上)・多湿は発病を助長する。 本病原細菌は病原力が強く、低密度でも発病する。	①種子消毒を行う。 (例) イブコナゾール・銅水和剤(テクリードCフロアブル) オキシリニック酸水和剤(スターナ水和剤) トリコデルマ アトロピリデ水和剤(エコホープDJ) ②育苗箱施薬を行う。 (例) カスガマイシン粒剤(カスミン粒剤)
苗立枯病 ( <i>Fusarium</i> <i>Pythium</i> <i>Rhizopus</i> <i>Trichoderma</i> )	①病原菌に汚染された床土を使用しない。 ②育苗箱等の資材消毒を行う。 ③厚播きをしない。 ④床土の土壌pHは5前後にする。 ⑤過湿、過乾燥にせず育苗する。 ⑥育苗中の温度管理に注意し、極端な高温・低温にならないようにする。  <b>【参考事項】</b> 薬剤防除を行う場合は、病原菌によって有効な薬剤が異なるので注意する。	①種子消毒を行う。 (例) イブコナゾール・銅水和剤(リゾープス菌・トリコデルマ菌)(テクリードCフロアブル) 銅・フルジオキサニル・ペフラゾエート水和剤(リゾープス菌・トリコデルマ菌・フザリウム菌)(モミガードC水和剤) ②育苗箱施薬を行う。 (例) ヒドロキシイソキサゾール・メタラキシム液剤(フザリウム菌・ピシウム菌)(タチガレエースM液剤) ベノミル・TPN水和剤(リゾープス菌・トリコデルマ菌・フザリウム菌)(ダコレート水和剤) ピカルブトラゾクス水和剤(ピシウム菌、フザリウム菌、リゾープス菌)(ナエファインフロアブル)
内穎褐変病 (細菌)	①健全種子を使用する。 ②窒素肥料を過用しない。  <b>【参考事項】</b> 本病は、茶米の原因となる。発生してからの薬剤散布は効果がない。	①育苗箱施薬を行う。 (例) イソチアニル粒剤(ルーチン粒剤) ②出穂期から穂ぞろい期に予防散布する。 (例) フェリムゾン・フサライド水和剤(ブラシンゾル、ブラシンフロアブル)
白葉枯病 (細菌)	①抵抗性品種を選ぶ。 比較的強：コシヒカリ、大地の風、あいちのかおりSBL、チヨニシキ、ミネアサヒ、ミネアサヒSBL ②窒素肥料を過用しない。 ③浸冠水しやすい場合は、用排水路を整備する。  <b>【参考事項】</b> 抵抗性弱：ハツシモ、峰ひびき 病原細菌は、サヤヌカグサやエゾノサヤヌカグサなどのイネ科雑草や被害わらなどで越冬する。 早期栽培、早生品種の早植栽培は、比較的被害が少なく、常発地では、浸冠水や台風直後にも防除する。	①育苗箱施薬を行う。 (例) イソチアニル粒剤(ルーチン粒剤) プロベナゾール粒剤(オリゼメート粒剤、Dr.オリゼ箱粒剤) チアジニル粒剤(ブイゲット箱粒剤) ②移植活着後または出穂3～4週間前に予防散布する。 (例) イソチアニル粒剤(ルーチン粒剤) プロベナゾール粒剤(オリゼメート粒剤、オリゼメート1キロ粒剤)
ばか苗病 ( <i>Gibberella</i> )	①健全種子を使用する。 ②塩水選を行い、重度罹病もみを除く。 ③厚播きをしない。 ④もみを土壌表面に露出させない。 ⑤育苗箱等の資材消毒を行う。  <b>【参考事項】</b> ベノミル耐性菌が発生しているため、浸種を兼ねたベノミル水和剤の低濃度長期浸漬はしない。 種子消毒の薬液温度が低いと効果が落ちるので、10℃以上にする。 温湯による種子消毒(60℃、10分)では、温湯処理後は速やかに冷却し、直ちに浸種する。すぐに浸種しない場合は、十分に乾燥(水分15%以下)してから、二次感染源(種籾、ムシロ)のない清潔な場所で保管する。	①種子消毒を行う。 (例) イブコナゾール・銅水和剤(テクリードCフロアブル) トリフルミゾール水和剤(トリフミン水和剤) プロクロラズ乳剤(スポルタック乳剤) チウラム・ペフラゾエート水和剤(ヘルシードTフロアブル)

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
ごま葉枯病 ( <i>Cochliobolus</i> )	<p>①健全種子を使用する。 ②塩水選を行い重度罹病もみを除く。 ③厚播きをしない。 ④もみを土壌表面に露出させない。 ⑤秋落水田に多いので、砂質田では、赤土、頁岩粉末、含鉄資材などの客入、低湿田では、排水工事を行う。 ⑥堆きゅう肥、固形肥料、緩効性肥料、けい酸、苦土肥料、無硫酸根肥料の施用、ようりん、カリ肥料の増施などを行う。 ⑦基肥の過用を避け、穂肥に重点をおく。 ⑧根腐れ防止のため、間断灌漑など、適宜排水を行う。</p> <p>【参考事項】 晩生、中生の早植など、生育期間が長すぎると発生が多くなる。縞葉枯病、黄化萎縮病にかかった株には、本病が多発する。穂枯症状は、ごま葉枯病菌などの寄生によっておこる。</p>	<p>①種子消毒を行う。 (例) イブコナゾール・銅水和剤 (テクリードCフロアブル) トリフルミゾール水和剤 (トリフミン水和剤) プロクロラズ乳剤 (スポルタック乳剤) チウラム・ペフラゾエート水和剤 (ヘルシードTフロアブル)</p> <p>②育苗箱施薬を行う (例) ヒドロキシイソキサゾール液剤 (タチガレン液剤)</p> <p>③穂ばらみ期と穂ぞろい期に防除する。 (例) フェリムゾン・フサライド水和剤 (ブラシングル、ブラシンプロアブル)</p>
いもち病 ( <i>Pyricularia</i> )	<p>①抵抗性品種を選ぶ。 葉いもち強：(山間部向け) 峰ひびき、ミネアサヒSBL 穂いもち強：(平坦部向け) みねはるか、あさひの夢、あいちのかおりSBL、大地の風、ゆめまつり (山間部向け) チヨニシキ、峰ひびき、みねはるか、ミネアサヒSBL ②健全種子を使用する。 ③塩水選を行い重度罹病もみを除く。 ④厚播きをしない。 ⑤覆土に注意しもみを露出させない。 ⑥育苗期間中の高温、多湿は発病を助長するので管理に注意する。 ⑦多肥条件での育苗は発病を助長するので、施肥に留意する。 ⑧稲わらに、いもち病菌が付着していることが多いため、稲わらの近くや敷きわらの上で育苗を行わない。 ⑨常発地では、健苗を早植えて、健全生育を図る。 ⑩補植用苗は補植後、すみやかに処分する。 ⑪窒素質肥料を過用しない。分けつ期が低温の年は、遅出来となり、穂いもちの発生が多くなりやすいので、穂肥(窒素)は控えめにする。 ⑫山間部では、冷水灌漑にならないよう、水管理に注意する。 ⑬温湯による種子消毒(60℃、10分)は、必ず乾粒を用い、処理温度と時間を厳守する。</p> <p>【参考事項】 抵抗性弱：あきたこまち、コシヒカリ 平坦部向け穂いもち強の品種の葉いもち抵抗性は強くないので注意する。 穂いもちの発生が多かった年に採種した種もみは、必ず塩水選及び種子消毒を行う。 中苗以上になると、発病しやすくなるので、植え遅れないようにする。 本県における葉いもちの初発は、苗いもちからの移行を除けば6月下旬である。 穂いもちに対する散布は、必ず予防的に行い、時期を失しないこと。 QoI剤耐性菌・MBI-D耐性菌の発生が全国各地で確認されているので注意する。 QoI剤など耐性菌発生リスクの高い剤の使用は年1回とする。また、採種ほやその周囲では使用しない。</p>	<p>①種子消毒を行う。 (例) イブコナゾール・銅水和剤 (テクリードCフロアブル) トリフルミゾール水和剤 (トリフミン水和剤) プロクロラズ乳剤 (スポルタック乳剤) チウラム・ペフラゾエート水和剤 (ヘルシードTフロアブル)</p> <p>②育苗箱施薬を行う。 (例) イソチアニル粒剤 (ルーチン粒剤) チアジニル粒剤 (ブイゲット箱粒剤) プロベナゾール粒剤 (オリゼメート粒剤、Dr. オリゼ箱粒剤)</p> <p>③発病前又は発病初期に防除する。 (例) アゾキシストロビン水和剤 (アミスターエイト) トルプロカルブ粒剤 (サンプラス粒剤、ゴウケツ粒剤) テブフロキン水和剤 (トライフロアブル) ピロキロン粒剤 (コラトップ粒剤5、コラトップ1キロ粒剤12) フェリムゾン・フサライド水和剤 (ブラシングル、ブラシンプロアブル) プロベナゾール粒剤 (オリゼメート粒剤、オリゼメート1キロ粒剤) メトミノストロビン粒剤 (オリブライ1キロ粒剤)</p>
紋枯病 ( <i>Thanatephorus</i> )	<p>①代かき後に浮遊するごみには、菌核が含まれているので取り除く。 ②密植しない。 ③窒素質肥料を過用しない。 ④水路の雑草を刈り取る。</p> <p>【参考事項】 早植栽培、直播栽培では発生が多い。早生品種や短稈品種では、上位葉鞘に病斑が伸展しやすい。本病菌は多犯性で、イネ科雑草(エノコログサ、ノビエ、ギョウギシバ、ヨシ、メヒシバなど)にも感染する。</p>	<p>①種子に塗抹処理を行う。 (例) ペンフルフェン水和剤 (エバーゴルシードFS)</p> <p>②育苗箱施薬を行う。 (例) フィプロニル・フラメトピル粒剤 (プリンスリンバー箱粒剤)</p> <p>③幼穂形成期から穂ばらみ期に防除する。普通期栽培では、高温のため病勢の進展が早いので、7月下旬に防除する。 (例) フラメトピル粒剤 (リンバー粒剤) フルトラニル粒剤 (モンカット粒剤)</p>

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
ケラ	①乾田直播では、早めに入水をする。 ②田面が乾くと被害が出ることもあるので乾かないように水管理をする。 <b>【参考事項】</b> 乾田直播栽培に被害が多い。	登録農薬はない。
イナゴ類	①春先の畦畔除草を徹底する。 <b>【参考事項】</b> 年1回の発生で、土中又は雑草や刈株の間に産みつけられた卵塊で越冬する。畦畔際に被害が多い。乾田直播栽培では、生育初期に被害が大きい。	①育苗箱施薬を行う。 (例) フィプロニル粒剤 (プリンス粒剤) ②若齢期に散布する。 (例) エトフェンプロックス粉剤、エトフェンプロックス粒剤、エトフェンプロックス乳剤 (トレボン粉剤DL、トレボン粒剤、トレボン乳剤) スルホキサフロル水和剤 (エクシードフロアブル)
アザミウマ類	①水田周辺や畦畔のイネ科雑草を刈り取る。 <b>【参考事項】</b> 開花期にもみに潜入して、穎の内側を加害する。そのため、イネシンガレセンチュウによる黒点米と区別しにくい変色米となる。	①育苗箱施薬を行う。 (例) イミダクロプリド粒剤 (イネアザミウマ) (アドマイヤーCR箱粒剤) フィプロニル粒剤 (イネアザミウマ) (プリンス粒剤) ②穂ばらみ期に防除する。 (例) エトフェンプロックス粉剤 (トレボン粉剤DL) カルタップ粒剤 (パダン粒剤4)
カメムシ類	①水田周辺や畦畔の雑草を刈り取り、イネ科雑草には常に穂がない状態にする。 ②7月下旬～8月上旬に出穂する品種の作付けを避ける。 ③水田内にノビエやイヌホタルイが残草している場合は、穂が出る前に除草する。 <b>【参考事項】</b> 斑点米を作る主なカメムシは、アカヒゲホソミドリカスミカメ、クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、トゲシラホシカメムシ、イネカメムシ、ミナミアオカメムシ、アカスジカスミカメムシなどである。早期栽培や早生品種の早植栽培に被害が多い。イネカメムシの加害により、不稔が発生し減収することがある。イネカメムシは、他の斑点米カメムシに比べ、水田への飛来時期が早く、出穂期と穂揃期 (出穂7～9日後) の2回防除が必要。農薬散布は午後から夕刻に行うのが効果的である。ミナミアオカメムシに対しては、合成ピレスロイド剤の効果は低いとされるので、発生している優先種を確認する。	①出穂期以降に防除する。 なお、休耕田が発生源になり本虫が多発する場合は、休耕田で出穂前に防除する。 (例) エチプロール粉剤、エチプロール粒剤、エチプロール水和剤 (キラップ粉剤DL、キラップ粒剤、キラップフロアブル) エトフェンプロックス粉剤、エトフェンプロックス乳剤 (トレボン粉剤DL、トレボン乳剤) ジノテフラン粉剤、ジノテフラン粒剤、ジノテフラン液剤 (アルバリン粉剤DL、アルバリン粒剤、スタークル粉剤DL、スタークル粒剤、スタークル液剤10、スタークルメイト液剤10) MEP粉剤、MEP乳剤 (スミチオン粉剤3DL、スミチオン乳剤) スルホキサフロル水和剤 (エクシードフロアブル)
ツマグロヨコバイ	①ツマグロヨコバイ耐虫性品種である大地の風、ゆめまつりを作付けする。 ②越冬幼虫の越冬源であるイネ科雑草を処分するために水田の秋起こしや畦草の除去を行う。 <b>【参考事項】</b> 本虫は萎縮病及び黄萎病を媒介するので、発病予防のための本虫防除は、苗ばかりでなく、育苗場所周辺の防除と田植前に本田の畦畔防除を行う。常発地では、越冬地の雑草処分や育苗箱施用等による防除を広域的に行うのが効果的である。薬剤抵抗性が発達しないよう同一農薬の連用は避ける。	①萎縮病又は黄萎病常発地では、粒剤を育苗箱施薬 (例1)、又は、本田初期に防除する (例2)。 (例1) イミダクロプリド粒剤 (アドマイヤーCR箱粒剤) カルタップ粒剤 (パダン粒剤4) クロチアニジン粒剤 (ダントツ箱粒剤、ワンリード箱粒剤08) シアントラニリプロール粒剤 (パディート箱粒剤) ベンフラカルブ粒剤 (オンコル粒剤5) (例2) エトフェンプロックス粉剤、エトフェンプロックス粒剤、エトフェンプロックス乳剤 (トレボン粉剤DL、トレボン粒剤、トレボン乳剤) ブプロフェジン水和剤 (幼虫) (アブロード水和剤、アブロードフロアブル) ②本虫による穂の被害を防止するために、出穂期頃に防除する。 (例) エトフェンプロックス粉剤、エトフェンプロックス粒剤、エトフェンプロックス乳剤 (トレボン粉剤DL、トレボン粒剤、トレボン乳剤) フルピリミン水和剤 (エミリアフロアブル)

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
ヒメトビウンカ	<p>①越冬世代成虫出現前に、水田、休耕田を耕起し、寄生植物となるイネ科雑草を枯死させる。</p> <p>②水田周辺や畦畔のイネ科雑草を刈り取る。</p> <p>【参考事項】 本虫はイネに対し直接的な被害はないが、縞葉枯病、黒すじ萎縮病を媒介するため防除が必要である。本虫は、雑草地、レンゲ、休耕田のスズメノテッポウで越冬し、麦畑、イネ科の作物や雑草などで繁殖して、6月中旬を中心に第1世代成虫がイネに飛来する。 近年、海外から飛来するヒメトビウンカでは、イミダクロプリド・フィプロニル感受性の低下が確認されている。</p>	<p>①縞葉枯病常発地では、粒剤を育苗箱施薬する。 (例) ジノテフラン粒剤 (アトラクトン箱粒剤、スターダム箱粒剤) クロラントラニプロール・トリフルメゾピリム粒剤 (フェルテラゼクサロン箱粒剤) ベンフラカルブ粒剤 (オンコル粒剤5)</p> <p>②早期栽培では5月下旬と6月中旬、早植栽培では6月上旬～7月上旬の間に、普通期栽培では6月下旬～7月中旬の間に防除する。 (例) ジノテフラン粒剤 (アルバリン粒剤、スタークル粒剤) エトフェンプロックス粉剤、エトフェンプロックス粒剤、エトフェンプロックス乳剤 (トレボン粉剤DL、トレボン粒剤、トレボン乳剤) ブプロフェジン水和剤 (幼虫) (アブロード水和剤、アブロードフロアブル) スルホキサフルル水和剤 (エクシードフロアブル)</p>
トビイロウンカ	<p>【参考事項】 早期発見、早期防除に努め、イネの株元に十分農薬がかかるように散布する。 生息密度が株当たり5頭以上のときは直ちに防除する。 幼虫が多発するのは8月中旬以降であるが、年変動や作期による変動が大きい。 本虫は初夏の高温、寡雨、空梅雨の年に発生が多い傾向があり、特にセジロウンカの高飛来年には発生が多い。 近年イミダクロプリド・ブプロフェジンに対する感受性の低下した本虫が確認されている。</p>	<p>①育苗箱施薬する。 (例) クロラントラニプロール・トリフルメゾピリム粒剤 (フェルテラゼクサロン箱粒剤)</p> <p>②発生初期に防除する。 なお、多発する場合には、8月中旬以降に2～3回防除する。 (例) エトフェンプロックス粉剤、エトフェンプロックス粒剤、エトフェンプロックス乳剤 (トレボン粉剤DL、トレボン粒剤、トレボン乳剤) エチプロール粉剤、エチプロール粒剤、エチプロール水和剤 (キラップ粉剤DL、キラップ粒剤、キラップフロアブル) スルホキサフルル水和剤 (エクシードフロアブル) フルピリミン水和剤 (エミリアフロアブル)</p>
セジロウンカ	<p>【参考事項】 本虫の発生は、飛来する時期及び飛来量によるので、年次変動が大きい。一般に幼虫が多発するのは7月中旬～下旬及び8月上旬～中旬の2回である。 8月中旬～下旬に羽化した成虫は、水田から脱出するので、これ以降の防除は必要ない。 近年フィプロニル剤への感受性が低下した本虫が確認されている。本虫は吸汁による生育不良、黄変枯死などの被害の他、イネ南方黒すじ萎縮病を媒介する。</p>	<p>①育苗箱施薬する。 (例) クロラントラニプロール・トリフルメゾピリム粒剤 (フェルテラゼクサロン箱粒剤)</p> <p>②発生初期に防除する。 (例) エトフェンプロックス粉剤、エトフェンプロックス粒剤、エトフェンプロックス乳剤 (トレボン粉剤DL、トレボン粒剤、トレボン乳剤) ブプロフェジン水和剤 (幼虫) (アブロード水和剤、アブロードフロアブル) スルホキサフルル水和剤 (エクシードフロアブル) フルピリミン水和剤 (エミリアフロアブル)</p>
イネドロオウムシ (イネクビソウムシ)	<p>①窒素肥料を過用しない。</p> <p>②水田周辺や畦畔のイネ科雑草を防除し、越冬や増殖する場所をなくす。</p> <p>【参考事項】 発生初期の防除が大切である。梅雨期が長く、冷涼な夏が続く年は被害が多くなる傾向がある。</p>	<p>①育苗箱施薬する。 (例) イミダクロプリド粒剤 (アドマイヤーCR箱粒剤) クロラントラニプロール粒剤 (フェルテラ箱粒剤) フィプロニル粒剤 (プリンス粒剤)</p> <p>②産卵期からふ化初期に防除する。 (例) エトフェンプロックス粉剤、エトフェンプロックス粒剤 (トレボン粉剤DL、トレボン粒剤) MEP粉剤、MEP乳剤 (スミチオン粉剤3DL、スミチオン乳剤)</p>

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
イネゾウムシ	①浅水管理をする。 ②窒素肥料を過用しない。	①育苗箱施薬する。 (例) カルタップ粒剤(幼虫)(パダン粒剤4) ②加害初期(5月中旬～6月上旬)に防除する。 (例) エトフェンプロックス粒剤(トレボン粒剤)
	【参考事項】 山間、山沿い地域に加害が多い。深水管理は加害を助長する。被害は葉色が濃く、軟弱なイネに多い。	
イネミズゾウムシ	①中苗又は成苗移植では、被害が軽減される。 ②浅水管理する。 ③根腐れするような水田では、幼虫の被害がやすいので、根を健全に保つよう努める。 ④6月以降に田植える。	①育苗箱施薬する。 (例) イミダクロプリド粒剤(アドマイヤーCR箱粒剤) カルタップ粒剤(パダン粒剤4) クロラントラニリプロール粒剤(フェルテラ箱粒剤) フィプロニル粒剤(プリンス粒剤) ベンフラカルブ粒剤(オンコル粒剤5) ②成虫飛来初期に防除する。 (例) エトフェンプロックス粉剤(成虫)、エトフェンプロック粒剤、エトフェンプロック乳剤(トレボン粉剤DL、トレボン粒剤、トレボン乳剤)
	【参考事項】 越冬は成虫で、主に水田周囲の山林、土手などで行うため、このような所では密度が高まりやすい。 5月の田植えは発生を助長し、被害が大きくなる。 田植後又は農薬施用後は、水の管理に注意し、排水、掛流などは避ける。	
イネヒメハモグリバエ(イネミギワバエ)	①移植後の垂れ葉を少なくするよう健苗を育成する。 ②深植え及び移植直後の深水を避ける。 ③灌漑水の温度を高める。	①育苗箱施薬する。 (例) イミダクロプリド粒剤(アドマイヤーCR箱粒剤) フィプロニル粒剤(プリンス粒剤) クロラントラニリプロール粒剤(フェルテラ箱粒剤) ②産卵期と幼虫の発生初期に防除する。 (例) MEP乳剤(スミチオン乳剤) PAP乳剤(エルサン乳剤)
	【参考事項】 山間部に被害が多い。 移植後、気温が低い年に発生が多い。 本田初期(6月上旬)に防除を行うが、防除が遅れないよう注意する。	
イネカラバエ(イネキモグリバエ)	①抵抗性品種を選ぶ。 強：コシヒカリ、ミネアサヒ、十五夜糯 ②スズメノテッポウ、ヌカボなどを刈り取る。	①育苗箱施薬する。 (例) フィプロニル粒剤(プリンス粒剤) ジノテフラン粒剤(アトラクトン箱粒剤、スターダム箱粒剤) ベンフラカルブ粒剤(グラントオンコル粒剤)
	【参考事項】 耐虫性弱：恵糯 第1世代幼虫は苗の時期に食入するので本田初期の葉の先端に小さな孔ができる。 第2世代幼虫は幼穂形成期に食入するので、傷穂となる。	
タネバエ	①腐敗臭が強い有機質肥料は避ける。	登録農薬はない。
	【参考事項】 乾田直播栽培に被害が多い。	
ニカメイチュウ(ニカメイガ)	①葉色の濃い品種や稈の太い品種の作付けを避ける。 ②過繁茂や葉色を濃くさせないように施肥・栽培管理を適切に行う。 ③珪酸を施用し稈を硬くさせる。	①育苗箱施薬する。 (例) ジノテフラン粒剤(アトラクトン箱粒剤、スターダム箱粒剤) スピノサド粒剤(ゼロカウント粒剤) フィプロニル粒剤(プリンス粒剤) クロラントラニリプロール粒剤(フェルテラ箱粒剤) ②第1世代の防除は、発蛾最盛期から7～15日後に行う。 第2世代の防除は、発蛾最盛期から5～10日後に行う。 なお、粒剤を使用する場合は、粉剤や液剤より3～5日早く散布する。 (例) カルタップ粒剤、カルタップ水溶剤(パダン粒剤4、パダンSG水溶剤) テブフェノジド水和剤(ロムダンゾル) MEP乳剤(スミチオン乳剤)
	【参考事項】 年2回発生し、稲わらや水田内の刈り株、マコモ内で幼虫越冬する。 1回目の発蛾最盛期は、早い地方で5月中旬～下旬、ふつうは6月中旬～下旬である。	

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
コブノメイガ	①葉色が濃くならないよう適切な施肥を行う。	①育苗箱施薬する。 (例) クロラントラニリプロール粒剤 (フェルテラ箱粒剤) フィプロニル粒剤 (プリンス粒剤) ②発生初期に防除する。 (例) エトフェンプロックス乳剤 (トレボン乳剤) テブフェノジド水和剤 (ロムダンゾル)
	【参考事項】 セジロウンカ、トビイロウンカと同様に海外から飛来すると考えられている。 8月上旬～9月に加害が認められ、発生量は年次変動が大きい。	
イネツトムシ (イチモンジセセリ)	①葉色が濃くならないよう適切な施肥を行う。 ②被害が多い地域では早期、早植栽培を行う。	①育苗箱施薬を行う。 (例) スピノサド粒剤 (ゼロカウント粒剤) クロラントラニリプロール粒剤 (フェルテラ箱粒剤) フィプロニル粒剤 (プリンス粒剤) ②幼虫発生期 (7月下旬～8月上旬) とその約10日後の2回防除を行う。 (例) エトフェンプロックス粉剤 (トレボン粉剤DL) カルタップ粒剤、カルタップ水溶剤 (パダン粒剤4、パダンSG水溶剤) テブフェノジド水和剤 (ロムダンゾル)
	【参考事項】 被害初期に早めに防除することが大切である。 梅雨明けに浸冠水した水田及び麦跡の遅植え田に発生が多い。 6～7月に高温寡雨の年は多発し、8月上旬に雨が少ないと被害がひどくなる傾向がある。	
フタオビコヤガ (イネアオムシ)		①育苗箱施薬を行う。 (例) ジノテフラン粒剤 (アトラクトン箱粒剤、スターダム箱粒剤) クロチアニジン粒剤 (ダントツ箱粒剤) クロラントラニリプロール粒剤 (フェルテラ箱粒剤) スピノサド粒剤 (ゼロカウント粒剤) ②幼虫発生期に防除する。 (例) エトフェンプロックス粉剤 (トレボン粉剤DL) カルタップ粒剤 (パダン粒剤4)
	【参考事項】 本田初期に被害が多い。	
アワヨトウ		①幼虫発生期に防除する。 MEP乳剤 (スミチオン乳剤)
	【参考事項】 6月下旬以降9月上旬までの集中豪雨後の冠水田に突発的に大発生することがある。	
イネヨトウ (ダイメイチュウ)		登録農薬はない。
	【参考事項】 7月中旬～下旬と9月上旬に発生する。 7月の被害は心枯茎が主で、9月の発生によって、点々と白穂ができる。	
スクミリンゴガイ (ジャンボタニシ)	①水口に網を張るなどして、水田への侵入を防ぐ。 ②発生水田では、中・成苗移植を行い、浅水管理する。 ③卵塊や貝を捕殺する。 ④冬期に耕起する。 ⑤直播栽培は、乾田直播で行う。	①育苗箱施薬を行う (食害防止)。 (例) カルタップ粒剤 (パダン粒剤4) ②1㎡当たり2個体以上みつけた場合、防除する。 (例) カルタップ粒剤 (食害防止) (パダン粒剤4) メタルデヒド粒剤 (スクミノン、ジャンボたにくん) リン酸第二鉄粒剤 (スクミンベイト3) ③植代前または刈取り後に防除する。 (例) 石灰窒素 (粒状石灰窒素40、粒状石灰窒素55)
	【参考事項】 在来のタニシ (オオタニシ、マルタニシ) よりも大きく成長し、夏から秋にかけて用水路の壁面やイネなどの茎の部分に鮮紅色の卵塊を産みつける。 本種は用水路に自生する水生植物類や水田雑草を好んで食べ、イネが被害を受ける時期は、移植後約2～3週間に限られる。 石灰窒素を使用する場合は、水温が15℃以上の時期に行い、田面水を用水路に流さないなど適正に使用する。また、肥料成分になるので施肥量等を考慮する。	

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
イネシンガレ センチュウ	①健全種子を使用する。 ②被害田の生もみ殻は、育苗などに使用しない。 ③60℃の温湯に10分間浸漬し、すぐに水で冷却する。温度にむらがあると効果が落ちたり、発芽障害を起こすので注意する。	①種子消毒を行う。 (例) MEP乳剤 (スミチオン乳剤) ②育苗箱施薬を行う。 (例) ベンフラカルブ粒剤 (オンコル粒剤 5、グランドオンコル粒剤) フィプロニル粒剤 (プリンス粒剤) ③本田で、葉先白枯症状 (ほたるいもち) を認めた場合は、防除する。 (例) MEP乳剤 (スミチオン乳剤)
<b>【参考事項】</b> 黒点米の原因となる。		